

「はな」では「花」か「鼻」かわからない

なるのがよくわかります。

「はな」

この字を見て、何か頭に浮かびますか。おとなでも、とっさには何も思い浮かびません。子供は、

「は、な」と発音するだけです。ところが、

「花」「華」「鼻」「洩」

となりますと、字を見たときに、それぞれに特有のイメージが、鮮やかに頭の中に形作られます。

「花」と「華」とは、元来は同じ実体を表わした文字ですが、構成が違いますように、それぞれに違った雰囲気をもっています。漢字は、そんな微妙なところまで表現しているのです。

ところで、「洩」を見たら、とたんに胸が悪くなるではありませんか。何だか、目の前に、あのねばねばしたいやな液体が見えるような気がして、おまけに、“ずるずる”という音まで聞こえるような気がしてきます。

こういう生きた働きをもつ漢字は、幼児の印象に強く焼きつけられて、経験を鮮やかに、しかもすばやく呼び起こす“信号”となるのです。

漢字の学習を重ねるに従って、幼児の頭の働きが、目立って活発に